



## わが愛すべき 80年代映画論 (第八回)

文章：かつお



### 『ステロイド合衆国 ～スポーツ大国の副作用～』 (原題：Bigger, Stronger, Faster\*) 2008年 監督：クリス・ベル

“Say your prayers, take your vitamins and you will never go wrong.”(祈りを捧げよ、ビタミンを摂れ、そうすれば正しく生きられる。)80年代を席卷した伝説のプロレスラー、ハルク・ホーガン\*1のこのあまりにも有名なセリフ。これは嘘だったのだろうか。クリス・ベルの悩みが始まる。

1981年1月、強いアメリカを体現する就任直後のレーガン大統領は、イランで人質となっていたアメリカ大使館員たちを解放せしめた。実に444日ぶりの解放にアメリカ中が沸いた。しかし、まだだった。まだイランからアメリカ人の手に戻っていないものがあつた。WWF(世界レスリング連盟)ヘビー級のチャンピオンベルトである。強烈なキャメルクラッチホールドでボブ・バックランドから強引にベルトを奪った憎きイランのアイアン・シーク。1984年1月23日、Real Americanことハルク・ホーガンが満を持して登場。見事にこのイラン人プロレスラーをマットに沈め、ベルトをアメリカに取り戻すのである。

ニューヨーク州ポキプシーで生まれたベル家の3兄弟はホーガンの勝利に狂喜する。さっそく地下室でプロレスのトレーニング。郊外の普通の家庭で育った彼らの憧れはハルク・ホーガン、そしてアーノルド・シュワルツェネッガー。強いアメリカ、勝者のアメリカの中で育ち、勝者になることを義務付けられた人生が始まる。ビタミンを摂り、ゴールドジムに通い、身体を鍛えれば成功する。強さと勝利を求めて努力すれば、結果は付いてくる。それが80年代アメリカの夢だった。

しかし、嘘だった。ホーガンもシュワルツェネッガーもステロイドまみれだった。大リーグのマグワイアもカンセコも。彼らは糾弾される。メディアで。

議会で。お前たちは『アメリカ的なもの』を汚した、と。アメリカ的? ランボー? コマンドー? それともステロイド的なスーパーヒーローであるキャプテン・アメリカ? 超人ハルク? ポパイ?

ふとスポーツ界の外に目を向けてみれば、オーケストラの演者はオーディションや本番前に精神を安定させる薬を飲んでいる。学生はテスト・ドラッグを愛用し、戦闘機のパイロットも安定剤を服用している。アメリカ中がチートだらけだ。それは勝者になるため。

「アメリカ人であるということの副作用」。それが本作の最も伝えたかったことである。3兄弟の真ん中のマイク・ベルは、ステロイドを服用する兄と弟、それからカール・ルイスからベン・ジョンソン、反対派の国会議員やステロイドで子供を失った(と信じ込んでいる)親まで様々なインタビューを通じて、Winnerでなければならぬが故に、Fairnessを常に犠牲にしてきたアメリカ人の真実の歴史をあぶり出す。80年代から現代に続くアメリカの病を痛いほど鮮明に表現した珠玉のドキュメンタリーである。

ハルク・ホーガンがベルトを取り戻してからちょうど33年後の同日、2017年の1月23日、トランプ大統領はTPPからの離脱に署名した。日本をはじめ世界中がアメリカ合衆国の変節に戸惑う中、わずか1年後の2018年1月23日、日本が主導したTPP11が最終的に協定文を確定し、アメリカを除く全ての国が合意した。政権が変わったから、ではない。ギリギリの局面ではWinnerであることがいつもFairであることより優先されてきたアメリカ。そのアメリカに何かを気付かせる役割を仮に極東の島国が果たせるとしたら、それは世界にとって意義深いことなのかもしれない。日米経済対話やTPPなどに関わる官僚諸兄には必見の映画であることは、言うまでもない。

連載

わが愛すべき80年代映画論

\*1) DVD表紙画像参照